

緊急会談

地域の医療 地域で守る。



新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）の第5波は、小田原市・県西部にも猛威を振るっている。特に若い世代の新規感染者が多く、家庭内感染も広がっている。いつ、どこで、誰が感染しても不思議ではない。感染者の増加により医療機関がひっばくし、自宅療養者が増えている。「地域の医療」を「地域で守る」ため、小田原市 守屋輝彦市長、小田原医師会 渡邊清治会長、小田原保健福祉事務所（保健所）長谷川嘉壽所長、小田原市立病院 川口竹男院長、小田原市消防本部 岸成典消防長が、9月6日に緊急会談を行った。

主幹／小田原市 ＊撮影時のみマスクを外しています

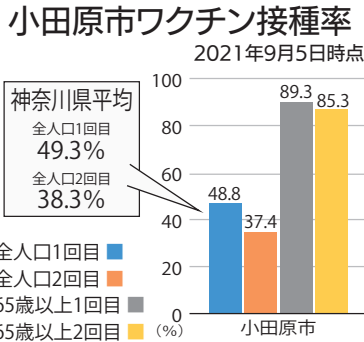
小田原医師会

自宅療養者をサポート

会長 渡邊清治



小田原医師会では、この



に県や市と協力して「おだわら予約制PCRセンター」を開設。検査体制を整備した当初から、陰性者であつても、その後の経過観察を地域の医師が電話で観察を行うなどしています。その後もコロナ対策については、医師会内で特別委員会を立ち上げて、保健所や小田原市立病院などの地域の病院とも協議しながら進めてきました。

ワクチンの早急な接種に取り組む

これらと合わせて、今年6月からは個別医療機関や集団でのワクチン接種にと、医療従事者をはじめ関係者の方とともに日々奮闘しています。接種率は神奈川県の平均とほぼ同じ推移で進んでいます。

こうした中でもデルタ株の猛威は凄まじく、子どもの感染や家庭内感染がこれまで以上に危惧されます。ワクチンの早急な接種を使命として、若い方のワクチン接種の促進や、感染予防、感染拡大防止の呼び掛けなどを止めることなく、一刻も早い収束に向け、共に取り組んでいきたいと思います。

「地域療養の神奈川モデル」始まる

コロナ患者が急増し、病床の目安を超えた中でも、小田原市立病院は一生懸命に耐えてくれています。医療崩壊を防ぐためにも、いかに在宅で重症化しないように適切なケア、サポートをしていくかが重要です。

現在、自宅療養者が増えている中で、地域住民の健康、地域の医療を守るため、医師会では県や地域の看護士

感染経路の特定が難しいデルタ株

現在、流行の主流となっているデルタ株は感染力が従来株の2倍といわれ、感染経路の特定が難しく、誰もがいつどこで感染してもおかしくない状況です。加えて、コロナの流行が長期間に渡っていることから、この感染症に対する危機感が薄れてしまうことが懸念されています。特効薬がない今、コロナは死に至る可能性のある感染症であることを、改めて一人ひとりが自覚していただき、他人事ではなく、自分事と捉えて感染予防対策を徹底していただきたいです。

地域医療の連携に感謝

7月後半以降の第5波は、全国的に過去最多の感染者数となり、病床がひっばくするなど災害に近い状況になっています。幸いにも、当管内では地域の医療機

業者、薬剤師などの医療関係者とタッグを組み、この地域でも「地域療養の神奈川モデル」として、地域の医療者の目で自宅療養者を診る体制を整えています。

自宅療養されている方々は、精神的に大きな不安を抱えています。リスクの度合いが高い方を中心に、医師や看護師が毎日の健康状態

この取り組みは、9月1日から医師の業務を先行して開始しています。9月中旬には看護業務も含めてしっかりと体制が整います。また、医療従事者、行政の方々が真正面を向いて懸命に取り組んでいます。自宅療養を安心して行っているだけでも、そして誰一人として取り残されることがないよう、小田原医師会としても関係者と一丸となって住民の健康をしっかりと支え、命を守っていきます。

医療従事者・保健所・消防・行政が結束

地域連携で医療崩壊を防ぐ

小田原市消防本部

未知の感染症 迅速な搬送を

消防長 岸成典



救急搬送への備え

昨年のコロナ発生以降、救急搬送は目に见えないコロナへの対応に心がけられました。未知の感染症への対応であり、隊員たちも感染リスクと隣り合わせでした。そうした中、最新の情報や疫学的知見、そして、日々の経験が新たな対策を生み、これまで知識とノウハウを積み上げてきました。また、搬送はコロナ患者だけではなく、コロナ患者以外の搬送の際に新型コロナウイルスを持ち込まないよう、細心の注意を払い搬送後の消毒作業も怠りません。



コロナ患者の救急搬送（訓練の様子）

件数は全体でおよそ1500件、うちコロナ患者は95件に上りました。また、自宅療養者が増える中、療養中に容体が悪化し、病院へ搬送するケースも見られます。

現状、傷病者を医療機関へ搬送する際の病院への問い合わせは、救急件数の約9割が2回以内の連絡で済んでおり、管内の医療機関の協力もあり、適切な救急搬送が行えています。しかし、感染力が非常に強いデルタ株や、新たな変異株など、いまだ感染の広がりが懸念される中、感染がこれまで以上に拡大すると状況はすぐに変化するでしょう。今後も医療現場と連携を図り、迅速な搬送を行ってまいります。

医療現場と連携図る

県西部唯一の 高度医療機関として

当院は、県西部で唯一「コロナ重症者を診療できる神奈川モデルの高度医療機関です。神奈川モデルでは陽性になると、症状に応じた病院での治療となり、圏域内の方でも転院され、ご家族の面会もできずに亡くなることもありました。そこで、専用病棟を設け、疑似症から重症までシームレスに診療できるよう高度医療機関となりました。

今年1月の第3波の時には救命救急センターの一部を改修し、重症専門病棟を増設。以降、2病棟で対応してきました。7月の第5波では、県内各医療機関のコロナ専用病床はひっばく。当院でも、7月後半から入院患者が急増し、8月には1日当たりの入院患者数が30人を超え、その半数はECMOや人工呼吸器などを使用する重症者でした。

県全域を医療体制とする神奈川モデルでは、確保ベッドを空けると、県内全圏域から入院要請があり、すぐに埋まってしまう状況でした。さらに、コロナ陽性の透析患者や小児、妊婦の受け入れのほか、自宅療養中に状態が悪化し、救急車で救急搬送されてくる陽性患者も増え、まさに救急医療現場では、医療崩壊が目前に迫っていました。

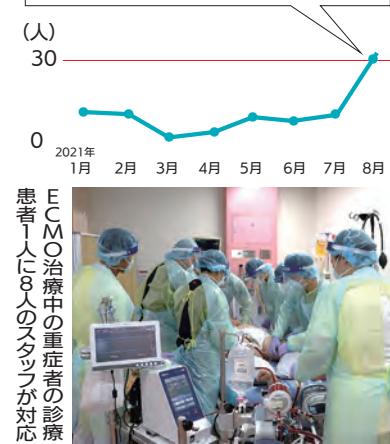
受け入れ体制を地域で整える

感染拡大の状況でも、地域の皆さんのため、自宅療養者には小田原医師会と保健所のサポートを、症状悪化の時や重症者には当院で入院治療を行うなど、地域の関係医療機関の総力戦で対応する体制を整えました。

関係医療機関の皆さんには引き続きご協力をお願いし、地域の皆さんにはぜひ、こうした医療現場の状況を知っていただき、今一度、感染拡大防止に向けた行動をとっていただきますようお願いいたします。

救急医療や一般診療はとめない

コロナ入院患者数の推移



ECMO治療中の重症者の診療
患者人に8人のスタッフが対応

感染力は2倍 デルタ株が猛威

所長 長谷川嘉壽



りました。幸いにも、当管内では地域の医療機

発熱や咳などの症状がある人、
感染の不安がある人は、
かかりつけ医に連絡してください。

かかりつけ医がない人は・・・
神奈川県新型コロナウイルス
感染症専用ダイヤル(24時間)
☎0570・056774

小田原市立病院

急性期医療も守る

院長 川口竹男



コロナ禍であっても、急病や重病



築き上げてきた信頼関係

感染力の強いデルタ株や新たな変異株が次々と生まれる中、ワクチンのブレイクスルーが発生するなど、コロナとの戦いはいまだ出口が見えませんが、そんな中、爆発的な感染拡大により、コロナ

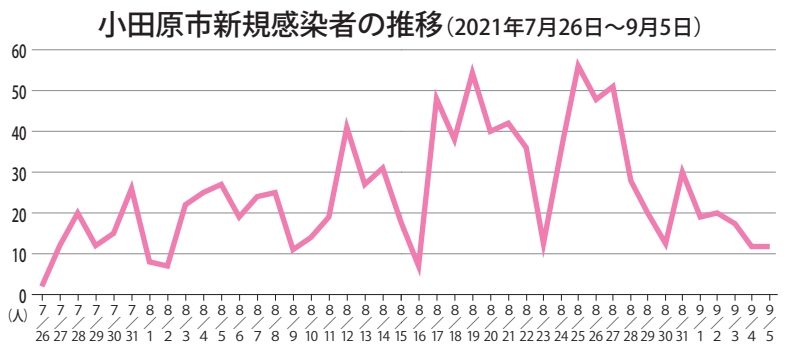
小田原市

最大の危機に 役割果たす

市長 守屋輝彦

直面する第5波

これまで、小田原市では1日の感染者数が多くても15人程度でしたが、7月28日に初めて20人となり、急激に感染者が増え、8月25日には過去最多の1日57人の感染者が確認されました。感染者数に比例して、市立病院での受け入れ患者数も病床を超える状況が続き、まさにコロナ禍最大の危機が迫っているといえるでしょう。



の脅威が本場にすぐそこにある今、地域医療の連携がこれまで以上に重要となっています。

小田原市では、感染防止や予防を担う保健所、地域医療の主軸としてワクチン接種や自宅療養者のサポート、コロナ患者の受け入れなどを担う小田原医師会や小田原市立病院、そして、いざというときに救急搬送を担う小田原市消防本部。どんなにITが進んでも、取り組むのは人間。お互いを信頼し合っているからこそ可能な取り組みです。それぞれがしっかりと役割を果たし、連携してコロナ対策にあたっています。